

二〇二六年二月二日

海からの風いちめん花菜畑  
観梅やリュックの中にワンカップ  
無人市野の花添へて猫柳  
近隣の手振り挨拶布団干す  
ほつれ髪撫ぜ整へて雛飾る  
半世紀変はらぬお顔雛飾る  
鳴き集ひ水鳥湾処占めけり  
麗らかな日につつまれて六地藏  
ヒ首の月小舟の如く凍て空に

よし女  
伸枝  
うつき  
そうけい  
もとこ  
こすもす  
むべ  
なつき  
山椒

二〇二六年二月二〇日

マツチ棒めく満天星の芽立ちかな  
塀越えて怒濤のごとく梅枝垂る  
万朶なる冬芽に兆す萌葱色  
探梅行帰りの道に足湯かな  
海風に真向き背きや黄水仙  
山動けとぞ吠ゆるごと春疾風

康子  
せいじ  
風民  
きよえ  
よし女  
花茗荷

二〇二六年二月一九日

半眼に猫の寝そべる路地四温  
白梅を手向けんと訪ふ母墓前  
山焼きの灰とんでくる駅ホーム  
真つ更の帯封解かれ初雛  
春眠のまぶたを射抜く車窓の陽  
梅が香に眼みひらく仁王かな  
春愁や咽びに似たるチェロの音

澄子  
きよえ  
よし女  
澄子  
康子  
きよえ  
むべ

二〇二六年二月一八日

目葉を二つさし終え春愁  
暁や雪瘦せたれどなほ堅し  
下萌の城址発掘なほ続く  
潮干狩巨船の波に尻濡らす

あひる  
和繁  
なつき  
みきお

水温む鷺の差し足忍び足  
春装の小紋路地入る神楽坂  
尾を曳いて春日ついばむ孔雀かな

伸枝  
むべ  
なつき

二〇二六年二月一七日  
伸びやかな鳶の笛降る里うらら  
春光をいつばいに受け海辺カフエ  
余寒なほボルシチ煮ゆる夕厨  
押しあひて菜花のつぼみ水弾く  
野辺ゆけば頬刺す風の余寒かな

やよい  
もとこ  
むべ  
あひる  
せいじ

二〇二六年二月一六日

梅守の鉄の手際潔し  
目隠しを解かれて笑まふ夫婦雛  
枝移りやまぬ目白や梅日和  
ぶらさがるだけの雲梯老の春  
冴返る稲荷祠の灯影かな  
青空を網目に透かす芽木の森  
春嵐辻を曲れば不意に凧ぎ

たか子  
よし女  
むべ  
伸枝  
うつき  
康子  
あひる

二〇二六年二月一五日

梅日和白壁に影くつきりと  
お砂踏み足裏に絡む余寒あり  
蟬梅の匂ひに山路逸れにけり  
蟬梅を映すひとみの清らなる  
枯木立蜃気楼めく池の奥  
縫いぐるみ眠りたさうや春日燦  
盆梅へ霧吹きめぐる杖の老  
淡雪を搔ば大きな露の臺

風民  
伸枝  
むべ  
うつき  
むべ  
山椒  
なつき  
ほたる

毎日句会みのる選・二〇二六年二月二四日